

第5分科会「里山と水鳥と農業」

テーマ：農業が元気になり、人も元気になり、野生動物も水鳥も自立して元気になる♪

日時：2008年4月19日(土) 13:00~17:00

場所：Qiball(きぼーる) 13階3号室

参加者：32名

スタッフ：荒尾 稔、加藤賢三



趣旨

家畜も、野生鳥獣も、そしてニンゲンも、この世に生きているものみんなそれぞれの存在意義があることを再確認し、生き物の自立と共存に向けて「千葉で実際何が出来るか？何をしていくか？」という具体的実現のためのアイデアを出し合う場になればと意図しました。

EUでは、動物にも生活を楽しむ権利がある。という意識で多頭飼育の弊害を排除して健康な家畜を確保したい法律が2013年から施行されると布告されました。

この世に生れ、生きているもので意味もなく、社会に貢献しない生き物はない。という原則。「農業の復興(自立した農業)が里山を再生する(動物の生活環境を改善する)」野生動物でも家畜でも、幸せに生きる権利を持てることが動物福祉の原点だと考えます

そこで、「里山と水鳥と農業」分科会では、まず、凍結せず、雪がほとんど降らないという、千葉県 の地政学的な位置付けがもたらした、昔の大陸からの大規模な冬の渡り鳥の越冬地であったであろう という推測があります。

講演者

基調講演「大型渡り鳥白鳥類の餌付けからの脱却と自立化」

利根川下流域に大規模な水鳥の越冬地第2局を形成する会

荒尾 稔

感染症に関する最新の情報提供

加藤 賢三

最近の動向が大きく変化してきています。コメントできないとのことで、講演は打ち切られました。そこで荒尾から、代わって、簡単に触れさせていただきます。

今回両分科会でも事の背景に「鳥インフル」が影となって浮かび上がってきていることは否定できません。白鳥でも餌付けに関して、鳥インフルにかかわる心配から、行政等各分野から、渡来地での介入がなされつつある個所もあるやと聞いています。

内容

白鳥の自立化を促すための具体的な行動プログラムがあります。その一部として白鳥類の餌付けを順次休止し、餌付けされた白鳥群を、自立させるプログラムをテスト中です。

そのためには、まず「農業が元気になり、人も元気になり、野生動物も水鳥も自立して元気になる♪」というまさにこのテーマのごとく、「ふゆみずたんぼ・不耕起栽培」とか、耕起を春まで遅らせるなどの、農業従事者の方々の気持ちにすべてがかかった部分があって、そこから話合いを始めなければなりません。

白鳥への餌付けをやめるということは、相互間の暗黙の了解事項があります。その部分を人間による対応と工夫で、相手によくわかるメッセージを発しつつ、対話をしつつ時間をかけて行なう必要があります。



相手の生態系を詳しく知り、無理のない形で、かつ最もメッセージが伝わりやすい形で行うことが肝要だと議論がなされました。

里山と水鳥

白鳥や鴨への餌付け問題がクローズアップされている。白鳥の餌付けから→白鳥の自立へ。ねぐらもえさ場も一緒。餌付けのもたらず問題点と解決方法。生息地を確保し自立を促す。世界有数の水鳥の越冬地を復活させることを結びつける。

- 1) 白鳥や鴨への餌付け問題が、野生動物である白鳥類のペット化であります。そして地域での費用負担。そして感染症への関心。餌付けのもたらず問題点と解決方法への模索が始まっています。
- (2) ふゆみずたんぼと不耕起栽培の組み合わせによる田んぼの新しい農法が、生き物を活性化させる



事例1 福島県いわき市夏井川の白鳥越冬地で、「給餌量の拡大と、これでよいのか」という疑問から、荒尾氏と意見交換をしながら考え出した方法。本当に大変なのは、白鳥群を自立させるための、「ふゆみずたんぼ」などの餌場の確保です。地域の農家の方々に支援を、お願いしている次第です。当初は、いわき市の国道周辺の田んぼに白鳥が至る所に出現して、地域で大変な話題に。

事例2 千葉県印旛郡栄町・本埜村でもやはり3年前から同じことをお願いして来ました。

今年は2番穂が大豊作になりました。

千葉の事例では、秋に収穫後の耕起をしなければ、乾田でも雨が降れば一転餌場となり、餌付けは不作時の救餌を中心にする事で解消できます。

さらにオナガガモの大規模な侵入渡来が重なって、最大800羽が、近隣の栄町の「ふゆみずたんぼ・不耕起栽培」の田んぼにほぼ全部が移動してしまった時期も出現してしまいました。

「ふゆみずたんぼ」への白鳥の集中ぶりはすごく、2番穂や落ち穂、そしてクワイの類を掘り出して食べます。

「ふゆみずたんぼ」は餌資源が豊富にある、ねぐらとして最適という事も理由の一つと考えています。

まとめ

- 総合ディスカッション 基調講演より、農業の再生が動物の生活環境の向上につながることを再認識し、千葉県での取り組みに向けて今後も話し合いを継続することにした。
基本としては、人も生き物も自立する、生活を楽しむ。農業が元気になり、人も元気になり、野生動物も水鳥も自立して元気になる
- 農業の現場を介した人と生き物の共生 白鳥等の餌付けからの脱却と、自立策を促す。その手法と現実を、また利根川下流域での水鳥の復活をもたらす。
- 農業と生物多様性となりわいと里山の再生は農家の方々のやる気にかかわる。NPOや市民や行政がどのように関わりあおうとしても、肝心の地権者である農家の方々のやる気が引き出せない限り、なかなか前に進まない。
 - 餌付け白鳥の自立と個体数自己管理がはじまり、千葉全域へ渡来地の分散へ
 - ふゆみずたんぼ・不耕起栽培は、温故知新であり、農家の方々の自立と生き方を活性化させる。
- 総合ディスカッション（2分科会合同）基調講演より、農業の再生が動物の生活環境の向上につながることを再認識し、千葉県での取り組みに向けて今後も話し合いを継続することにした。